

「とこしえの宝玉」～知里幸恵『アイヌ神謡集』のこと～

高部知史

私が入社する際、最初の配属先として任命された場所は、縁も所縁もない北海道は札幌でした。配属になったことを好機と思い、小林多喜二『蟹工船』、三浦綾子『氷点』といった文学作品をはじめ、北海道新聞社の「さっぽろ文庫」シリーズや、北大出版会が誇る名著『北海道主要樹木図譜』など、「地産地読」と言わんばかりに北海道に関わる本を随分読みました。中でも一番印象に残っているのは、国語辞典の編纂者として有名な金田一京助（1882-1971）の、アイヌに関する研究書や随筆集です。

当時東京帝国大学に在学していた20代半ばの金田一は、当代一流のアイヌ研究者、J・パッチェラー（1854-1944）に導かれ、初めて北海道の土地を訪れます。アイヌ語は他の言語との関連性が明確でない孤立言語（isolated language）であり、また文字を持たない言語（unwritten language）です。未知の言語を理解するために、金田一は滅茶苦茶な絵を描き、それを見たアイヌの子どもが「ヘマタ？（何？）」と首をかしげる。その「ヘマタ」の一語を用いて様々な言葉を採集し、アイヌ語の理解を深めていったという有名なエピソードは、異文化との接触の生々しさを今に伝えます。そんなアイヌの世界で、口伝によって脈々と引き継がれてきた「ユーカラ」（「ユカラ」ともいう）という豊かであり、かつ神聖なる詩的世界に触れ、金田一はこの類い稀な文化を残したいと奮起します。その折に出会ったのが、天才少女・知里幸恵（1903-1922）です。

母親が函館にあるクリスチヤンの伝道学校を卒業しており英語が堪能、さらに父親も進歩的な考え方の持ち主で、その環境のもとで育った知里もまた教養が高く、新しいことに取り組む気概を持った人でした。さらに知里の家系はユーカラの口伝継承者として高名なユーカラクル（ユーカラの謡い手）でもありました。彼女は15歳の時に金田一と知り合い、その勧めによって17歳から祖母や伯母が謡うユーカラを、ローマ字によって記録し始めます。その後東京

に移り、金田一のもとでユーカラの日本語への翻訳を行い、その成果は『アイヌ神謡集』に結実します。知里には遺伝的な痼疾があり若干19歳で夭折しますが、この功績は単にアイヌ文化の保存というだけでなく、その文化の継承者自身による最古の記録として「とこしえの宝玉」（金田一の言葉）といえます。金田一と知里という二人の天才が邂逅し遺した奇跡ともいえるでしょう。

グローバル化、デジタル化の潮流が世界を席卷し、本を取り囲む世界も当然ながら、その荒波の中にあります。『アイヌ神謡集』も英語、フランス語、ロシア語、エスペラント語に翻訳され読まれており、また国内では青空文庫で電子テキストが公開されております。先人達の叡智や想像力が書籍という器に蓄積され、時に海を越えて送り届けられ、あるいは自宅のパソコンから気軽に触れることができということは、現代を生きる私たちの特権です。1冊の書籍が単に特定の文化の習俗や歴史を伝えるだけでなく、その文化が存在する（していた）ことを伝えているという事実には、本に携わる仕事をしている一人として畏敬の念を抱きます。

「とこしえの宝玉」という言葉は、『アイヌ神謡集』の歴史的・文化的価値に対する金田一の比喩的な賛辞ですが、京都外国語大学附属図書館には文字通りの宝玉と呼ぶべき数多くの稀覯書によるコレクションがあり、それらの定期的な展示会を開催されております。また特徴的な外国語資料、言語学資料の学外への貸し出しにも精力的に取り組まれており、「発信型図書館」として社会、文化に貢献されております。古今東西の様々な資料が発信され、受け手が現れることを待っているのです。私も一人の受け手として、そうした資料を媒介として文化が後世に伝えられる様子を目にし、微力ながらその企てに貢献できることを願ってやみません。

たかべ さとし（紀伊國屋書店 京都営業部）